慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「再生」の文化 : 日本人の造形と美意識 : (1)遷宮について
Sub Title	The concept of regeneration : Japanese sense of form and beauty (special issueAesthetics now)
Author	紺野, 敏文(Konno, Toshibumi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1993
Jtitle	哲學 No.94 (1993. 1) ,p.181- 204
JaLC DOI	
Abstract	The concept of 'regeneration' can be seen in multifarious aspects of Japanese culture. In early Japanese history, the importance of regeneration is particularly striking. Regeneration manifested itself in such diverse forms as the transfer of the Capital, the rebuilding of Shinto Shrines (of which Ise Jingu was and still is a prime example), and the transfer of Buddhist Temples. In Medieval Japan, regeneration can be seen in the art of ikebana (flower arranging), or through the transitory outlook of the world contained in the writings of Kamo no Chomei, or even in the sculptural works of Unkei and his pupils housed at Todai ji and Kofuku ji. Regeneration here does not mean just a rebirth or merely creating something anew, it means a resuscitation or a rebringing to life forces already present. Through the concept of regeneration one can begin to understand the Japanese artistic consciousness. Perhaps one could even say that regenaration can be seen through current archaeological excavations and art historical surveys. In this paper, 1 focus my discussion of the concept of regeneration as manifested in early Japanese history on the many relocations of the ancient Imperial Palace.
Notes	特集「審美学百年」記念論文集 美学美術史学の現在
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000094-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「再生」の文化

——日本人の造形と美意識——(1) 遷宮について

紺　野　敏　文*

The Concept of Regeneration:

Japanese Sense of Form and Beauty

Toshibumi Konno

The concept of 'regeneration' can be seen in multifarious aspects of Japanese culture. In early Japanese history, the importance of regeneration is particularly striking. Regeneration manifested itself in such diverse forms as the transfer of the Capital, the rebuilding of Shinto Shrines (of which Ise Jingu was and still is a prime example), and the transfer of Buddhist Temples. In Medieval Japan, regeneration can be seen in the art of *ikebana* (flower arranging), or through the transitory outlook of the world contained in the writings of Kamo no Chomei, or even in the sculptural works of Unkei and his pupils housed at Todai ji and Kofuku ji. Regeneration here does not mean just a rebirth or merely creating something anew, it means a resuscitation or a rebringing to life forces already present. Through the concept of regeneration one can begin to understand the Japanese artistic consciousness. Perhaps one could even say that regenaration can be seen through current archaeological excavations and art historical surveys. In this paper, 1 focus my discussion of the concept of regeneration as manifested in early Japanese history on the many relocations of the ancient Imperial Palace.

* 慶應義塾大学文学部教授（美学美術史学）

はじめに

生と死，創造と破壊，生成と衰滅は自然と人事に通ずる不断の現象である．ここに有限性，不滅性を超えた永遠の時間性を求めれば，それらが絶えず繰りかえす円環的な「永遠回帰」の思想が生まれよう．また，ひと度の死や滅亡を肯定することによって「復活」の可能性が説かれる．しかし，再活性の時はいつどのようにすれば巡ってくるのであろうか．

これに対し，インド的思考に始まる輪廻（saṃsāra）思想は生あるものが必ず生死を繰り返すことを見通しているが，生と死は一転する関係ではなく，三界六道を経て循環するから，これを絶つためには解脱によってはじめて超越できるとされ，たどり得た空の境地が理想化されている．中国の神仙思想では不死性が時間の永遠性を実現すると把え，永遠の生命を保持するための実践的な道術を説く．金丹術（『漢書』にいう「黄白の術」―黄金と水銀による術）などの三事[1]がそれである．

一方，仏教の三世（traiyadhvika）思想では個人や個物だけでなくすべての存在を現在の世界（現世），過去の世界（過去世または前世），未来の世界（来世）にわたるものと観じ，それぞれの時間の長さを極大に設定することによって，永世は無時間性に置換されている．ここでは超越的な存在者如来（tathāgata〈真実へ赴いた〉の意味）が過去に属した場合でも，「復活」と異なる「生まれ変わり」または「補処」を勤める存在者（仏性ある者）が未来に出現するとして措定されているけれども，再生の時ははるかに遠く，むしろ現世は不確定に揺れているといえよう．

ところで，古く人類は生命や活性の実体が霊的存在アニマ（anima; 霊魂，精霊，祖霊など）として人間だけでなく動植物や無生物にも宿ると信じたと考え，これを宗教文化の根源とみてアニミズと呼んだのがイギリスの人類学者タイラーである．この霊魂の観念は日本においても仏教との習合という現象で認められ，現実の肉体が死しても魂（たましい）は存続するという遊

離魂の実在化は，例えば盆に死者の霊が現世に戻ってくるという民間信仰にもみられる．一方，遊離霊とは別種の呪的な作用力をもった霊魂マナ(mana) の存在が説かれ，タイラーの弟子マレットは霊力，生命力としてのマナがすべてのものに宿り，これを転移させることもできるとするアニマティズムの見方を示した．この説は生命力の根源にふれる現象を説明するものとして，自然物や宗教的儀礼，言霊(ことだま)，呪物崇拝等に関り我が国の古代信仰を解く方法としても応用されている[2]．

右にとりあげたような永生を求める観念は最初にふれた西洋的，イスラム的発想を別にすれば，何らかの形で日本の近世以降に及ぶ慣習・俗信のなかにとり込まれている．しかし，造形を産み出す力としてみるとき，それらは部分的，一時的関連をいい得るにすぎない．筆者は日本の造形文化を通じて認められる現象には独特の「再生」観があったと考え始めている．本稿では，古代から中世にかけて日本の典型もしくは特徴を示すとみられる造形文化としての宮都の造営，神社・寺院建築，彫刻，文学，生花等をとり挙げ，それらを通して「再生」が造形原理として働いる様相を考察してみようと思う．

(1)

住居は一つどころに落着いて住む（澄む，棲む，止む）という行為の形式である．住居を持つのは人間のほか，動植物，無生物にわたるが，人間の世界観の中では霊魂や神・仏の住居が定められ，また造作される．人間もまた生ける間の住居と同様に死後の住居が造形される．

ここでは人間の住居と神の住居（神社)，仏の住居（寺院）に限ってとり挙げ，スムことの観念と住居のあり方の関係について考えてみよう．人間の関る住居のうち，古代の住居に対する観念を『万葉集』や『記』『紀』等の史料や遺構を通して典型的にうかがい得るものに宮殿の造営がある．

宮殿は皇居として構えた建物であるが，これを宮というのはミ（霊力）

の宿るヤ（屋）という意味による．宮殿は「神宮」であり，「斎の宮」として神の住居を指すが，「神ながら」の天皇が住むところも宮となる（天皇の神の尊の　大宮は　此處と聞けども　大殿は　此處と聞けども[3]」（万葉集巻一，29）．ちなみに，『万葉集』の冒頭に雄略天皇が「籠もよ　み籠持ち　掘串もよ」に始まる御製歌の末尾に「吾こそは　告らめ　家をも名をも」と詠まれているのは「この岳に　菜採ます兒」の家と同じように大泊瀬幼武（天皇）個人の住居を意図したものである．

さて，皇居としての宮の所在地はミヤコ（都，宮處）と呼ばれ，政治・文化の都市としてのいわゆる宮都（都宮，都城）を形成するが，天皇の住居には天の下知らしめす処所としての正宮（大宮）のほかに行宮（仮宮），離宮が営まれた．ところで，その正宮でさえ，永続的であったわけではない．そういえるのは平安宮というよりその所在地だけで，明治2年(1869)東京に遷った宮都もまだ123年しか経っていないが，すでに遷都論がくり返されている．奈良時代以前は一代一宮が原則であったといえる．

皇宮（正宮）が初めて営まれたのは『記』『紀』の説話によれば，神武天皇の白檮原宮（橿原宮）である．同天皇の「東征」は高千穂宮（『記伝』によれば霧島山の所在）での議りに発しており[4]，安定した政治の場を東に求めて日向から行動を開始するが，目指すのは「東に美き地有り．青山四周れり．」（『紀』）という境域であった．そこに達する間に，豊国（豊前・豊後の地）で一騰宮（『紀』は「一柱騰宮」とする）が造られ，それより竺紫（筑前国遠賀郡という．『紀』では筑紫国）の岡田宮に遷して一年，さらに阿岐国（安芸国）の多祁理宮（『紀』は埃宮）に七年，吉備の高島宮（『紀』は高嶋宮）に八年居住したことが伝えられ，その後もいくつもの住居を設けたであろうがそれらは記されていない．ともあれ，これらの宮の性格は高嶋宮について「行館を起りて居す」（『紀』）というように臨時のものであったことはいうまでもなかろう．これに対し，橿原宮の造営にあたっての令に，民が巣に棲み穴に住む習俗のままであるのに

都宮一覧（神武～持統朝）

代	天皇（漢風諡号）	都宮の名称		所在	（現在地名）	遷宮年月
1	神武（じんむ）	白檮原宮	〔橿原宮〕	畝傍	（橿原市）	即位元年（辛酉）正月
2	綏靖（すいぜい）	高岡宮	〔高丘宮〕	葛城	（御所市）	元年正月
3	安寧（あんねい）	浮穴宮	〔浮孔宮〕	片塩	（大和高田市）	2年
4	懿徳（いとく）	境岡宮	〔曲峡宮〕	軽	（橿原市）	2年正月
5	孝昭（こうしょう）	掖上宮	〔池心宮〕	葛城・掖上	（御所市）	元年7月
6	孝安（こうあん）	秋津島宮	〔秋津嶋宮〕	葛城・室	（御所市）	2年10月
7	孝霊（こうれい）	廬戸宮	〔廬戸宮〕	黒田	（磯城郡田原本）	元年12月
8	孝元（こうげん）	堺原宮	〔境原宮〕	軽	（橿原市）	4年3月
9	開化（かいか）	伊邪河宮	〔率川宮〕	春日	（奈良市）	元年10月
10	崇神（しうじん）	水垣宮	〔瑞籬宮〕	磯城	（桜井市）	3年9月
11	垂仁（すいにん）	玉垣宮	〔珠城宮〕	磯城・纒向	（桜井市）	2年10月
12	景行（けいこう）	日代宮	〔日代宮〕	纒向	（桜井市）	4年11月
			※〔高屋宮〕	日向	（宮崎県）	12年11月
			※〔高田宮〕	築紫後	（福岡県）	18年7月
			※〔綺宮〕	伊勢	（三重県）	53年12月
			※〔高穴穂宮〕	志賀	（大津市）	58年2月
13	成務（せいむ）	高穴穂宮		志賀	（大津市）	
14	仲哀（ちゅうあい）	豊浦宮	〔豊浦宮〕	穴門	（下関市）	2年9月
		訶志比宮	〔橿日宮〕	筑紫	（福岡市）	8年正月
			※〔笥飯宮〕	角鹿	（敦賀市）	2年2月

(つづき)

代	天皇（漢風諡号）	都宮の名称		所在	(現在地名)	遷宮年月
			※〔徳勒津宮〕	紀伊	(和歌山市)	2年3月
	神功（じんぐう）		※〔豊浦宮〕	穴門	(下関市)	摂政元年2月
			〔若桜宮〕	磐余	(桜井市)	3年正月
15	応神（おうじん）	明宮		軽	(橿原市)	
			※〔吉野宮〕	吉野	(吉野郡)	19年10月
16	仁徳（にんとく）	高津宮	〔高津宮〕	難波	(大阪市)	元年正月
17	履中（りちゅう）	若桜宮	〔磐余若桜宮〕	磐余	(桜井市)	元年2月
18	反正（はんぜい）	柴垣宮	〔柴籬宮〕	丹比	(羽曳野市)	元年10月
19	允恭（いんぎょう）	遠飛鳥宮		飛鳥	(明日香村？)	
			※〔藤原宮〕	藤原	(橿原市)	7年12月
			※〔茅渟宮〕	河内	(泉佐野市？)	8年2月
20	安康（あんこう）	穴穂宮	〔穴穂宮〕	石上	(天理市)	元年前紀12月 (允恭42年)
21	雄略（ゆうりゃく）	朝倉宮	〔朝倉宮〕	泊瀬	(桜井市)	元年前紀11月
22	清寧（せいねい）	甕栗宮	〔甕栗宮〕	磐余	(桜井市)	元年正月
			※〔角刺宮〕	忍海	(北葛城郡)	3年7月
23	顕宗（けんぞう）	近飛鳥宮	〔近飛鳥八釣宮〕	飛鳥	(明日香村？ 河内飛鳥郡？)	元年正月
24	仁賢（にんけん）	広高宮	〔石上広高宮〕	石上	(天理市)	元年正月
25	武烈（ぶれつ）	列木宮	〔泊瀬列城宮〕	泊瀬	(桜井市)	元年前紀12月

（つづき）

代	天皇（漢風諡号）	都宮の名称		所在（現在地名）	遷宮年月
26	継体（けいたい）		〔樟葉宮〕	葛葉（枚方市）	元年正月
			〔筒城宮〕	山背（綴喜郡）	5年10月
			〔弟国宮〕	乙訓（乙訓郡）	12年3月
		玉穂宮	〔玉穂宮〕	磐余（桜井市）	20年9月
27	安閑（あんかん）	金箸宮	〔勾金橋宮〕	勾（橿原市）	元年正月
28	宣化（せんか）	廬入野宮	〔廬入野宮〕	檜隈（明日香村）	元年正月
29	欽明（きんめい）	師木島宮	〔磯城嶋金刺宮〕	磯城（桜井市）	元年7月
			※〔泊瀬柴籬宮〕	泊瀬（桜井市）	31年4月
30	敏達（びだつ）		〔百済大井宮〕	百済（河内長野市？北葛城郡？）	元年4月
		他田宮	〔幸玉宮〕	訳語田（桜井市）	4年
31	用明（ようめい）	池辺宮	〔池辺雙槻宮〕	磐余（桜井市）	元年前紀9月
32	崇峻（すしゅん）	倉梯柴垣宮	〔倉梯宮〕	倉梯（桜井市）	元年前紀8月
33	推古（すいこ）		〔豊浦宮〕	豊浦（明日香村）	元年前紀12月
			※〔耳梨行宮〕	耳梨（橿原市）	3年5月
		小治田宮	〔小墾田宮〕	小墾田（明日香村）	11年10月
34	舒明（じょめい）		〔飛鳥岡本宮〕	飛鳥岡（明日香村）	2年10月
			※〔田中宮〕	田中（橿原市）	8年6月
			※〔厩坂宮〕	厩坂（橿原市）	12年4月
			〔百済宮〕	百済（橿原市）	12年10月

（つづき）

代	天皇（漢風諡号）	都宮の名称	所在（現在地名）	遷宮年月
35	皇極（こうぎょく）	※〔小墾田宮〕	小墾田（明日香村）	元年12月
		〔飛鳥板蓋宮〕	飛鳥（明日香村）	2年4月
36	孝徳（こうとく）	〔難波長柄豊碕宮〕	難波（大阪市）	大化元年12月 （白雉2年10月遷都）
		※〔子代離宮（こしろのかり）〕	難波（大阪市）	2年正月
		※〔蝦蟇行宮（かはずの）〕	蝦蟇（大阪市）	2年9月
		※〔小郡宮（おこほり）〕	小郡（大阪市）	3年
		※〔武庫行宮〕	武庫（武庫川市）	3年12月
		※〔味経宮（あじふの）〕	味経（大阪市）	白雉元年正月
		※〔飛鳥河辺行宮〕 （中大兄皇太子の行宮）	飛鳥（明日香村）	4年 （5年12月遷居）
		〔飛鳥板蓋宮〕	飛鳥（明日香村）	元年正月
37	斉明（さいめい）	※〔小墾田宮〕 （宮殿完成せず）	小墾田（明日香村）	元年10月
		※〔飛鳥川原宮〕	飛鳥（明日香村）	元年冬
		〔後飛鳥岡本宮〕	飛鳥（明日香村）	2年
		※〔両槻宮（ふたつきの）（天宮（あまつ））〕	田身嶺（桜井市） （多武峯）	2年
		※〔吉野宮〕	吉野（吉野町）	2年
		※〔石湯行宮〕	熟田津（松山市）	7年3月

(つづき)

代	天皇（漢風諡号）	都宮の名称	所在（現在地名）	遷宮年月
		※〔磐瀬行宮〕	磐瀬（福岡市）	7年3月
		〔朝倉橘広庭宮〕	朝倉（福岡市）	7年5月
38	天智（てんち）	※〔長津宮〕	那津（福岡市）	元年前紀7月
		〔近江大津宮〕	近江（大津市）	6年3月
39	天武（てんむ）	※〔嶋宮〕	嶋（明日香村）	元年9月
		※〔岡本宮〕	飛鳥（明日香村）	元年9月
		〔飛鳥浄御原宮〕	飛鳥（明日香村）	元年冬
		(新城（にいき）〈大和郡山市仁木〉に遷都宮の計画)		5年，11年3月
		※〔広瀬野行宮〕	広瀬野（北葛城郡）	10年10月
40	持統（じとう）	〔藤原宮〕	藤原（橿原市）	8年12月

(注)　1. 都宮は『記』『紀』による．〔　〕は『紀』の宮名．
　　2. ※は行宮または離宮をあらわす．

「宮室」を経営りて後に，「都」を開くことを可しとし「観れば，夫の畝傍山の東南の橿原の地は，蓋し國の奥区か．治るべし」と宣して有司に命じ帝室をつくり帝位したという（『紀』）．

しかし，次の綏靖天皇は即位元年に大和の葛城に高岡宮を営んでいる（『紀』は「葛城に都つくる．是を高丘宮と謂ふ」とする）．以下，持統天皇が藤原宮を営むまでの歴代天皇の宮を『記』『紀』によってみれば別表のようになる．

もとより，『記』『紀』の記述はそのまま歴史的事実を反映するものではなく，とくに神武天皇以降，仲哀天皇またはその後の応神天皇までは作為された説話記事が多いとみることは津田左右吉以後の古代史研究者の常識であろう．一方で，その記述内容の中から具体的な史実や説話・風俗・慣習・言語・思考法等が今日新たな学問的方法によって光をあてられ，古代史像の構築が進められていることも周知のとおりである．

さて，別表の都宮がどの地に比定されるかについては今日の考古学の進展によって確定されているものは藤原宮ほかまだ極めて少ない情況であるが，宮跡と推定されるもの，その伝承を有し考証されている所は数多い．

いま，ここで問題となるのは都宮の比定地の当否ではなく，天皇一代の遷宮が習いになっていたという八世紀初め頃までの勅撰記録の史伝から考えられる住まいに対する古代人の観念である．ところが，『記』『紀』ともに遷宮・遷都の理由について伝えるところがない．後にも述べるように，斉明天皇が飛鳥板蓋宮から飛鳥川原宮に「遷り居し」たのは「飛鳥板蓋宮に災けり」（『紀』）という理由からであったが，これは例外的である．

ここで，まず遷宮の時期についてかりに史実の信憑性の高い敏達天皇以降に限ってみても，天皇即位の年に始まるのが原則であったと考えられる（別表に「元年前紀」とあるのは，同じ年に前天皇の崩御と新天皇の即位が重なることからとった記法で，実際は新天皇即位の時である）．もとよりその造営が順調に進む場合と何らかの事情で滞る場合があったことはいうま

でもない．後者の場合，当初は行宮で過ごし（皇極天皇，天智天皇），あるいは前の天皇の正宮にとどまって本格的造営にかかる場合（斉明天皇の後飛鳥岡本宮，持統天皇の藤原宮の造営など）がある．いずれにしても，一時的という意味では行宮的性格であったことに変りなかろう．

即位した天皇によるその都度の皇宮の造営には政治的なもくろみも当然あったであろう．しかし，強固な政権をつくろうとするのが目的であるならば，いたずらに都をうつすことによる政策の不徹底，人心の不安，経済的疲弊などがマイナス要因となったであろう．しかも，これを排して遷都をくり返したとすれば，むしろ定住（不遷都）に対する恐れから，転住・遷宮による新生を期したのではなかろうか．宮に「居る」のは一つどころに一定の時間住まうことであって，その主体はあくまで主権者である天皇であり，ときに皇族がこれに替ることがあった．「遷り居す」というのは，とくに行宮に移るときに用いられるとは限らず，例えば天武天皇は「宮室を岡本宮の南に営る．即冬に，遷りて居します．是を飛鳥浄御原宮と謂たまふ[5]」と記される．その飛鳥浄御原に遷る直前は「嶋宮より岡本宮に移りふ」のであった．持統天皇が同天皇4年（690年，この正月に亡夫天武を継いで皇后鸕野讃良皇女が即位した）10月に藤原の宮地を観してから4年後の12月になって藤原宮が整うが，この時も「藤原宮に遷り居します」と『紀』に表記されている．『万葉集』に見える藤原遷都の詞書きにも「藤原の宮に遷居りたまひ」という（巻一，51）．即ち，宮はウツル所であった．ウツはそのまま現われる意で，実体が変質しないで別の場に顕現することがウツルという行為である．しかも遷（都）にはその行為によって，万象のよみがえることが期されている．それは主権者のみならず大宮に仕える者にとっても生命の誕生し，よみがえる場であった．「藤原の大宮つかへ　生れつくや　處女がともは　羨しきろかも」（『万葉集』巻一，53）という作者不詳の歌は遷都をことほぐ意がこめられていよう．

『記』『紀』の記述からみれば，一代の天皇が崩ずることによって，天皇

自身は葬りまつられ，その住まいである大宮，そして宮都も一代限りで葬られ，後は「古りにし都」となろう．次の天皇にとって前代の都宮は再生の場にならないから，即位した天皇は新益を「つくる」ことによって皇位の正統をも秩序づけるのである．

柿本人麻呂が「近江の荒れたる都を過ぎし時」に作ったという有名な長歌一首と短歌二首には，天皇観，遷都観，民衆観が込められていて極めて興味深い．

玉襷（たまだすき）　畝火の山の　橿原の　日知（ひじり）の御代ゆ　生（あ）れましし　神のことごと　樛（つが）の木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを　天（そら）にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え　いかさまに　念ほしめせか　天（あま）離（ざか）る　夷（ひな）にはあれど　石走る　淡海（あふみ）の國の　楽浪（さざなみ）の　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇（すめろき）の　神の尊（みこと）の　大宮は　此處（ここ）と聞けども　大殿は　此處と云へども　春草の　繁く生ひたる　霞立つ　春日の霧（き）れる　ももしきの　大宮處（どころ）　見れば悲しも　　(巻一，29)

まず，「玉襷　畝火の山」から「天の下　知らしめししを」までは『記』『紀』に記す神武天皇の橿原遷都をふまえた上で，歴代天皇の誕生し，その治世が今日（天智天皇の御代）まで続いていることを叙しているが，「神（天皇）のことごと」が「樛の木の　いやつぎつぎに」治世したという表現には，万世にわたる国体＝天皇観はない．一代毎の天皇の「生（あ）れ」の観念は，樛（栂）というマツ科の常緑高木のもつ，つぎつぎと生命の絶えないイメージと「つが」と「つぎつぎ」の音韻とを重ねて[6]，強く再生の意味をそのリズムに託しているとみられる．

次に，「天にみつ　大和を置きて」から「大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇（天智）」までの叙詠では，しばらく大和とりわけ推古天皇以来，飛鳥に定着した感のあった宮都の所在が夷（ひな）の地である近江の大津に遷ったことに対して「いかさまに　念ほしめせか」といぶかっている．これは遷都に対する疑念ではもとよりなく，都市の繁栄も一代限りであること

の象徴的風景として荒れたる都を眺めた感慨として次の句章に連がる．末尾の「ももしきの　大宮處　見れば悲しも」という悲傷の詠嘆には反歌と併せ人々の心情も深く汲むものがあろうが，その反面で今在る大和の青い瑞山（三山）と吉野山に囲まれた藤原宮を「常にあらめ」（巻一，52）と讃歌する「史観」がこれと対応している．宮都の万代（永生）を念ずるという造営も一代のうちであるという観念は，例えば人麻呂が高市皇子の殯の宮のときに詠んだ長歌に「わご大王の　萬代と　念ほしめして　作らしし香具山の宮　萬代に　過ぎむと念へや」（巻一，199）と歌い込まれている．だから，荒れたま　まの近江の「舊き堵」とは対称的に，例えば飛鳥寺が他の地にウツルことができれば，「故郷の　飛鳥はあれど　あをによし　平城の明日香を　見らくし好しも[7]」（巻六，992）として「再生」が朗らかに歌われる．また，難波宮（長柄宮）が大化元年（645）の孝徳天皇の造営以来久しく荒れていたのが復興されると，聖武天皇の行幸に従った歌人笠金村は「荒野らに　里はあれども　大王の　敷き坐す時は　京師となりぬ」（巻六，929）と詠んでいる．

次に，遷都によって得られるのが永い歴史の転回の各一回に充足する蘇生であるならば，新都・新宮の条件はどのようであったか．これをうかがい知るのには，それぞれの都宮の跡にあたって実態を確認する必要が生じるが，いまはその段階に至っていない．ここでも多くは『記』『紀』『万葉集』によって仮説としてのべようと思う．

（2）

さて，とりわけ推古天皇以降，都宮が集中して営まれその遺構の発掘調査が進んでいる飛鳥地方（明日香村，橿原市の一部など）について眺めてみよう．まず本来の「飛鳥」の地は香具山を北限の要として南限のミハ山（仏頭山）に向かって開かれた低平地で，青垣のような低い山・丘によって囲まれている．そして南東から北西に斜行するように明日香川が流れて

いる[8]．ここを香具山に登って国見をした舒明天皇は「國原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし国そ」(巻一，2) と詠んでいるが，宮殿造営地の原点は香具山にほかならない．香具山のみは「天の香具山」と呼ばれ，畝火山と耳梨山と同様に樹葉の繁茂する青い山として映った（「大和の　青香具山」〈巻一，52〉）が，それ以上にこの山は神武東征伝にも見えるように天下を安定させる埴土（はにつち）の呪力をもつ山であった．その土を取ったところを埴安（はにやす）といったという『紀』の記述は『万葉集』(巻一，52．巻二，201) に見える「埴安の提」「埴安の池」と照応する．

飛鳥のもう一つの象徴は現在よりもはるかに流勢のあったことが発掘調査で知られている飛鳥川[9]であったと思われる．当時の川でいえば絶ゆること流れる清冽かつ激つ河内として印象された吉野川が持統天皇をはじめとする諸天皇，歌人の心を惹きつけたことは周知であるが，吉野川に対して持った永生を期する観念と「明日香川」に対して抱いた観念とは異なるようである．『万葉集』をとってみても，吉野川を詠んだ歌に対して飛鳥川を詠んだ歌は少ない．その中で，明日香皇女（天智天皇の皇女）の殯の宮の時，人麻呂の詠った長歌（巻二，196）をみると，川藻のイメージに託して皇女を哀悼するのは詩想の方法として優れてふさわしいと思われよう．しかし，靡きそよぐ川藻のイメージは吉野川には全くない．

「飛鳥（とぶとり）の　明日香の河の　上つ瀬に　石橋渡し　下つ瀬に　打橋渡す　石橋に　生ひ靡ける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生ひををれる　川藻もぞ　枯るればはゆる」

と詠い出して，このような「川藻の如く　靡かひし　宜しき君」とつなげるのであるが，いささか強引なほどのレトリックである．ここで注意されるのは「絶ゆれば生ふる」「枯るればはゆる（生）」という再生観が明瞭に詠われていることである．これが「み名に懸かせる　明日香河」即ち明日香皇女の名にかかるという明日香（河）の風景であると把えられている．都宮もまた絶ゆれば生ふるというそのくり返しを飛鳥に見せていたのである．

次に，藤原宮の境域風景を詠んだ藤原の宮の御井の歌（巻一，52）をみると，まず「埴安の　堤の上に　在り立たし　見し給」うた持統天皇の視点から宮都の地が見渡されている．東の大門には春山のように繁さびて立つ青香具山，西の大門には瑞山である畝火山，北の大門には青菅山を成す耳梨山，そして南の大門には吉野山が雲居に遠く配されているという立地で，さらに「日の御影（宮殿）の　水こそは　常にあらめ　御井の清水」というように永世を意味する水の存在が不可欠である．今日も宮趾からみる風景はほぼそのままで保っている．これは飛鳥にくらべて一層広い空間を大和の「青垣山」の景観の中に設定したものであり，先に引いた神武紀の「青山四周」もこのような境域を指して記述したものといえよう．

こうして都宮の空間設定のなかで求められたのは，「とりよろふ山[10]（近くにある山）」「よろしき山[11]（側に寄って行きたい山）」であり，「水」であった．というのも，青山や瑞山（「あをによし奈良の山」ほか）を見ること，そこに青々と繁茂する樹葉や花木，清き水を見ることが生命を強化するという呪力信仰として存在した[12]と同時に，それらの枯れては生ふる自然の摂理に再生の観念を深めていた．一方，吉野離宮が飛鳥や奈良からもひんぱんに行幸の対象となったのは，「見れど飽かぬ吉野の河」があり，「畳はる青垣山」があり，そこに花鳥が群れて，それらが見るごとに生命を振るわす（タマフリ）からで，それ故に「萬世に　絶ゆることなくまた還り見む」（巻六，911）という永世にわたる再生の場として存在したのである．したがって，吉野は一代の都宮（大宮）としては求められず（もしそうなれば，再生機能を持たなくなる），くり返し天皇に見る行為を求めた主体となり，それによってのみ「貴くあらし」[13]の離宮＝行宮として存在したのである．

以上，住まいとしての都宮の営まれた境域の主要な一端について述べたが，都宮として説話化され伝承されているところを含めて検討すればさらに興味ある事象が浮かび上がってくるであろう．それには考古学，歴史学

建築・美術史学，文学，言語学，民俗学，園林学等にわたって多角的に考察する必要があろう．

ともあれ，今日までに飛鳥地域で発掘調査が進められ，まだ解明されているとはいえないものの，いずれかの宮の遺構として推定されているところは少なくない．その主なものをとりあげ造営の意図をさぐってみよう．

(3)

飛鳥の宮跡として推定発掘されている主なものに豊浦宮，小墾田宮，飛鳥板蓋宮伝承地，飛鳥稲淵宮ほかがある．まず，豊浦宮について．推古天皇（敏達天皇の皇后）が暗殺された崇峻天皇のあと 592 年の 12 月に即位したのが豊浦宮においてであり，その地は明日香村豊浦の向源（こうげん）寺あたりと推定されている．ここは同天皇の母（堅塩媛（きたしひめ））の父蘇我稲目の向原（むくはら）家のあったところとみられる．近年の調査により，630 年代の頃建立されたとみられる寺院講堂跡の下層地から掘立柱建物が見い出された．桁行（南北）三間以上，梁行（東西）三間の総柱建物で，床張りをしていたと考えられ，その床下に石敷が設けてあることから建物は高床式であったと推定されている．玉石や礫を敷いた石敷の舗装は建物のまわりにも見られる（4メートル幅）が，これは飛鳥の宮殿遺跡の特色という．ここから瓦はまったく出土していないから，草葺き[14]であったろう．出土した土器は 6 世紀末から7世紀初め頃のものに限られるというから，豊浦宮の存在した時期（603 年まで）と矛盾しないが，調査面積に制約があり全貌が把えられているわけではない．ただ，推定の宮殿跡地は南北 200 メートル，東西 100 メートルほどの範囲を出ないから，朝廷と内裏が未分化の初期の宮殿構造であったとみられよう．

ところで，『元興寺伽藍縁起資財帳』によれば，推古天皇は同 11 年に豊浦宮から小墾田宮に移りその跡を豊浦寺としたというが，この推定宮殿跡に山土で版築した上に建立されたのが豊浦寺であったと見られている．こ

の跡地からは飛鳥寺創建時に用いられたものと同じ木型またはこれを崩した文様につくる単弁軒丸瓦がかなり出土している．瓦葺きの堂塔を備えたこの寺の建立は飛鳥寺の造営中に既に着手されていたと考えられる．ここに注意されるのは，宮殿跡を寺院にあてたことである．推古天皇が豊浦宮を置いて新たに小墾宮を営んで遷ったことについては,「中国を中心とする国際社会に飛躍する推古朝の宮室としては手狭であった」とする見解(15)などがあり，寺院として捨てるために遷宮したとは考え難いが，また寺院として遺す理も考え難い．

しかし，飛鳥寺の建立にあたって，崇峻天皇元年 (588) に飛鳥衣縫造の家をあらかじめ壊している（『紀』）のは飛鳥の都市計画による措置であったと考えられると同時に，豪族や貴族ほか有力者が住まいを寺院に捨て，または改めるという平安時代に連なる事例を考えると，これは居館から寺院にうつる最も早い例としてみることもできよう．豊浦宮の規模は当時の豪族の居館程度の規模であったと推測されているが，宮都の地に造仏・造寺が営まれた後代の例としては，聖武天皇が甲賀信楽に離宮を設けた紫楽宮（甲賀宮）の地に大仏の造営が始められ，その後に寺域として継がれたこと，また同天皇により相楽の恭仁京（大養徳恭仁大宮）に山城国の国分寺が営まれたことなどが著しい．

こうしてみると，その先例となる豊浦宮から豊浦寺へという変遷には何らかの意図が潜んでいたと想われてくる．さて，宮殿と寺院の性格で最も異なるのは宮殿がいずれにしても一代またはその一時期の建築として機能することで足りたのに対して，寺院及びその建造物はそこに祀られる仏像とともに恒久的であるという点である．その実現はともかく，仏教では，少くとも現在から未来にわたる無際限の時間が思惟されている．こうして，草葺きの掘立柱の建物と瓦葺きの丹塗りの柱を礎石に据えた強固な構造の建物の性格の相違は明らかである．しかも，構造の強固さという実利面によってこの宮殿建築から寺院建築にそのまま移行したのではない．飛鳥寺

が整備され，豊浦寺が建立され始めたその時期に，小墾田宮は「大殿」と朝堂を左右に構えた「朝庭」などから成るという機能的にも規模の上でも発達した都宮を建設しているが，堀立柱の建築形式を変えていない．即ち，行宮的性格である．かくて，豊浦宮を寺についで行く，つまり一時の住まいを恒時の住まいとして「再生」させるという転換は仏教的思惟方法を知ることによって始めて試みられたのではなかろうか．ただし，宮殿建築が寺院に転用されたのではない．宮殿と寺院は二律背反しながら飛鳥の地で共生して行くが，寺院は飛鳥寺も川原寺も橘寺もその位置と結構を維持する一方で，宮殿は藤原宮にわずかにとどまるまで（藤原宮三代といっても16 年間にすぎないが），いそがしく新造をくり返している．

このうち，天智天皇の初年の頃に建立されたと推定される川原寺についても，発掘の結果寺跡の下層から整地を行い，石組暗渠を設けた跡が発見され，斉明天皇が655年に遷り居した飛鳥川原宮の遺構とみられている．この宮殿は短命で翌年には同天皇によって後飛鳥岡本宮に替えられるが，これを改めた川原寺の寺域とほぼ同じく200メートル4方，4ヘクタールほどと推定されるから，豊浦宮の二倍の範囲だったろう．寺院の建立については天智天皇が母親の斉明天皇の冥福を祈る意図によるものとみる説がある．斉明天皇の殯（もがり）は661年「飛鳥の川原」で行ったと伝えられ（『紀』），その地を孝徳天皇の行宮であった飛鳥河辺行宮にあてる見方もあるが，その宮跡が明らかにされているわけではない[16]．ともあれ，斉明天皇の没後にそのゆかりの地に寺が建立されたとすれば，もとより天皇の遺志は不明ながらその宮殿はとり壊され整地された上で寺院として再生がはかられたといえよう．しかし，寺院もまた自ら再生を行うために，宮都とともに他地に遷り，または同じ寺域で位置を移すことをも要したが，これについては稿をあらためて述べよう．

ところで，宮殿建築についても旧来の工法を変えようと試みることがあった．在位中に「狂心」的な造営工事を行うと謗られた女帝斉明天皇は大

化の改新後，皇極の名を改め655年正月に飛鳥板蓋宮に重祚する．この板蓋宮は皇極天皇の2年(643)新宮(にいみや)として営まれたところである．飛鳥寺南方に掘立柱や石敷をもつ伝板蓋宮は，出土瓦が藤原宮のものと同じ様式を示すなどから今日板蓋宮ではないことが明らかになっており，その上下層から成る十数ヘクタールの宮殿遺蹟はまだ宮名を特定できる段階に至っていない．ともあれ，「板蓋宮」そのものは，草葺きに替えて当時では新しい板蓋の屋根にしたことから名づけられたと考えられる．さらに，斉明天皇は即位の年8月には小墾田に「宮闕(おほみや)を造り起(た)てて瓦覆(かはらぶき)に擬将(せむ)とす」と伝えられる（『紀』）．寺院建築としてしか用いられなかった瓦葺き屋根を架けようとしたのである．ところが「深山広谷(ふかきやまひろきたに)にして，宮殿(みや)に造らむと擬(す)る材(き)，朽ち爛れたる者多し．遂に止めて作らず」という事態で実現しなかった．この『紀』の記事の解釈について諸説がある．

前にも触れたように，小墾田宮は当初推古天皇が豊浦宮に次いで同天皇11年(603)に造営したもので，同36年(628)に天皇がここで崩ずるまで続き，舒明天皇を継いだ皇極天皇（斉明天皇）が即位直後の642年12月に遷ったのも小墾田宮であった．小墾田宮の地はこれまで豊浦寺北の「古宮」土壇付近が考えられてきたが，1970年の調査でその南方から玉石敷の庭園を伴う掘立柱建物などが見つかり，7世紀初頭から前半にかけて造営された宮跡と推定された．しかし，これが小墾田宮であると確証されるには至っていない．一方，この後の調査で飛鳥川右岸の雷丘(いかづちのおか)東方遺跡から，奈良時代中頃から平安時代初頭にかかる頃の掘立柱建物や平城宮式の軒丸瓦などを用いた建物跡が知られ，さらに「小治田宮」と記した土器の発見などによりこれが8世紀後半の称徳朝小墾宮であったことが確定された．

さて，各朝の「小墾田宮」が同一位置に営まれたと考える必要はないが，問題の斉明朝小墾田宮造営が頓挫したことについて，推古朝小墾田宮が50余年を過ぎて存続していたとみて，その掘立柱建物が瓦葺きに耐えなかったのではないかと考える見解が出されている[17]．これまで，推古朝の宮殿

とは別に新たに宮を営もうとしたもので，深山に材を求めたために用材が朽ちたとする「不自然な見方」に対するものである．また，この年の冬の条に見えるように「板蓋宮の火災にかんがみて，延焼防止に有効な瓦葺を採用しようとし，屋根の重さに耐える用材を深山広谷に求めた」とする見解もある[18]．

第三の見解の難点はまず，板蓋宮の火災が小墾田宮の造営着手に先立つと仮定しているが，これは前にも触れたように，板蓋宮が焼失したことにより飛鳥川原宮に遷ったとする『紀』の明記するところと矛盾するし，また前もって防災策を考えていたとしても，瓦自体が延焼にある程度耐えるにしろ，木造の建物の延焼防止にはなり得ない．ここで原文をみると先の引用文に続けて「又於二深山広谷一、擬レ造宮殿一之材、朽爛者多。遂止弗レ作。」とある．この文に関して一つは深山広谷の地において，宮殿を造ろうとしたがその建築用材が朽ち爛れているものが多かったために，遂に止めざるを得なかったと解されよう．もう一つはさらに訓み下しに則せば宮殿を造ろうとして建築用材を深山広谷に求めたが，朽ち爛れたものが多かったために遂に止めざるを得なかったと解されよう．前者については，小治田宮が雷丘にほど近いとして，その地を深山広谷と形容したかどうかも疑問であるから，後者の意味にとるのがより自然であろう．ともあれ，この時小墾田の地に新たに宮殿を造ろうとしたとみるべきであろう．斉明天皇は板蓋宮と幻の小墾田宮を除いても7つの宮を造営しており，推古天皇以来の旧宮に瓦葺きのために固執したとは考え難い．また，この文は瓦葺きに改めるためには建築材が朽ち過ぎていたという論理ではない．

ここに推測すれば，新宮の造営にあたっては，旧材をあえて求めることはなかったろう．もとより新材を求めることが「再生」のための条件であったと考えられる．その用材は，明日香の青山・瑞山から伐き出すわけにはいかなかったろうから，明日香を遠く離れた深山広谷に鬱蒼と茂る古木(神木に擬し得る樹木) を探したのであろうが，これがウロのあるような

材で，建築用材として不適当であったというのが実情ではなかったろうか．ちなみに，斉明天皇は661年5月に福岡の朝倉橘広庭宮を造り遷っているが，この時，朝倉社（『延喜式』に見える麻氐良布神社）の木を伐り除って，「此の宮を作る故に，神忿りて殿を壊つ」こととなり，また大舎人ほか死者が多く出たという記事が『紀』に見える．

（4）

都宮の営みを通してみられた再生の観念は宮殿の造形のなかにどのように表現されたであろうか．7世紀以前の宮殿建築のヒナ型はまだ構築されるにいたっていない．遅れて始まった仏教建築と比較しても実態の把握には未知の部分が多く，考古学的究明に基く建築造形学への展開も緒について間もない．しかし，都宮殿の造形思考が神社宮殿と結びついていることから，手がかりの多い神殿の形態とその造形観念に考察を及ぼしていかねばならない．ここに，あらかじめ宮殿建築の原型をうかがわせる素材を検しておこう．

一つは『万葉集』のなかにミヤコの建物に関して歌った次の額田王の一首である．「秋の野の　み草刈り葺き　宿れりし　兎道の宮處の　仮廬し念ほゆ」（巻一，7）．これは飛鳥川原宮に天の下知らしめしし天皇（斉明）の代と詞書に見えるもので，集中の註記から行幸の折の行宮について詠んだものと考えられる．行宮はすでに見たように正宮の本質をあらわすものであり，宮殿は草葺きの仮廬に淵源する．

二つは同じく人麻呂が持統天皇の吉野離宮への行幸に従ったときの長歌（巻一，36）で，そのなかで歌人は「吉野の國の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷きませば」と叙している．宮殿はひと言太い宮柱で象徴されているのである．同種の表現は難波長柄宮に聖武天皇が行幸したときに笠金村が詠んだ長歌（巻六，928）にも「長柄の宮に　真木柱　太高敷きて」とある．ちなみに，真木は万葉歌に瀕出する語で，「真木の葉の　しな

ふ勢の山」(巻三，291) など樹葉が茂って勢の盛んな様子をいうときにも用いられる．ま（真）は完全であり，また本物であり，すぐれているという意味で，真木は被・槇に通じて檜・杉・松・槇などを指している[19]．

次に『記』及び『紀』神代上に伊弉諾尊・伊弉冉尊が「天之御柱」(天柱) を竪てて神殿（八尋殿）を作ったことが見える．また『記』大国主神の国譲りの条に，「住所をば天つ神の御子の天津日継知らめす登陀流，天の御巣如して，底津石根に宮柱布斗斯理（地中に宮柱を太く建て)，高天の原に氷木多迦斯理て（空高く千木をそびえさせて）治め」るという出雲大神の希望にそって，天の御舎を造ったという記事がある．

さらに，垂仁記では出雲大神がわが宮を天皇の御舎（宮殿）のように修理りたまわば天皇の悩みが解決されると告げるところがある．ついで神代紀第九段（一書第二）に「其の宮を造る制は，柱は高く大し．板は広く厚くせむ」と明記している．

このように，宮殿と神殿建築の交渉するなかで，宮柱地中より太く立つ姿は出雲大社や伊勢神宮等の神社建築の象徴となって展開する．それはまさしく「再生」の象徴ともなるものであった．

(1992 年深秋　上海にて稿了)

註

(1) 『抱朴子』釈滞に，神仏を求めるための三事として「精を宝つこと」「気を行すこと」「一大薬の服用（金丹術)」を挙げている．

(2) 土橋寛『日本語に探る古代信仰——フェティシズムから神道まで』中公新書 中央公論社 1990 年．

(3) 以下の万葉集の引用は武田祐吉校註『万葉集』角川文庫本 (1954 年) による．

(4) 『記』神武天皇の東征で同天皇は「何地に坐さば，平らけく天の下の政を聞し看さむ．猶東に行かむ」と議っている．

(5) 『紀』天武天皇元年，是歳の条．

(6) 山部赤人が飛鳥の神岳（ミハ山か）に登って詠んだ長歌にも「三諸の　神奈

備山に　五百枝さし，繁に生ひたる　樛の木の　いやつぎつぎに　玉葛　絶ゆることなく」(巻三，324) とある．笠金村の長歌 (巻六，907) にもこれと同様の句がある．

(7) 詞書に「大伴坂上郎女の，元興寺の里を詠める歌」とあり，「古郷の飛鳥」は現明日香村の飛鳥寺をいい，「平城の明日香」は現奈良市の元興寺をいう．養老2年 (718) に遷っている．

(8) 狭義の「飛鳥」の範囲については，岸俊男『宮都と木簡——よみがえる古代史——』(吉川弘文館　1977 年) においてなされている．その飛鳥の境域論については，紺野敏文「大和の仏像——飛鳥からの転生——」(久野健・杉山二郎編『仏像集成』第6巻「日本の仏像〈奈良 (II)〉」所収　学生社　近刊) 参照．

(9) 飛鳥川は洪水がしばしば起こり，水路も幾度か変っていると見られ，灌漑のためにも木ノ葉井堰ほか各所に井堰を設けている (和田萃「飛鳥川の堰—弥勒石と道場法師—」『日本史研究』130 号　1973 年)．なお，『万葉集』の柿本人麻呂の歌に「明日香川　しがらみ渡し　塞かませば　流るる水も　長閑にかあらまし」(巻二，197) と詠まれている．

(10) 「大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山」(巻一，2) ほか．

(11) 「隠国の　泊瀬の山は　出で立ちの　よろしき山　走り出の　よろしき山の」(雄略紀) ほか．

(12) 注 (2) 土橋書．

(13) 大伴旅人の長歌 (巻三，315)「み吉野の　芳野の宮は　山からし　貴くあらし　川からし　清けかるらし　天地と　長く久しく　萬世に　変らずあらむいでましの宮」

(14) 茅葺については仁徳紀に「宮垣室屋，堊色せず．栟梁柱楹，藻飾らず．茅茨蓋くときに，割斉へず」と記すが，『六韜』による記述である．草葺きについて『万葉集』に「秋の野の　み草刈り葺き　宿れりし　兎道の宮處の　仮廬し念ほゆ」(巻一，7) と見える．板蓋宮のあるように，『万葉集』にも「板蓋の　黒木の屋根は　山近し　明日取りて　持ち参り来む」(巻四，779) と詠まれているが，ここでは樹皮つきの葺き方であろう．檜皮葺ほかの樹皮葺きがあったことを示唆している．

(15) 木下正史「地中に眠る宮と寺」(井上光貞・門脇禎二編『古代を考える　飛鳥』所収，吉川弘文館　1991 年)．

(16) 飛鳥川上流の稲淵川沿いに発見された「飛鳥稲淵宮殿跡」は東西棟二棟 (正殿)，南北棟二棟 (後殿) などの掘立柱建築に石敷を設けた7世紀中頃の造

営と推定されており，これを飛鳥川辺行宮にあてる説もなされているが，不確定である．注 (15) 木下論文参照．

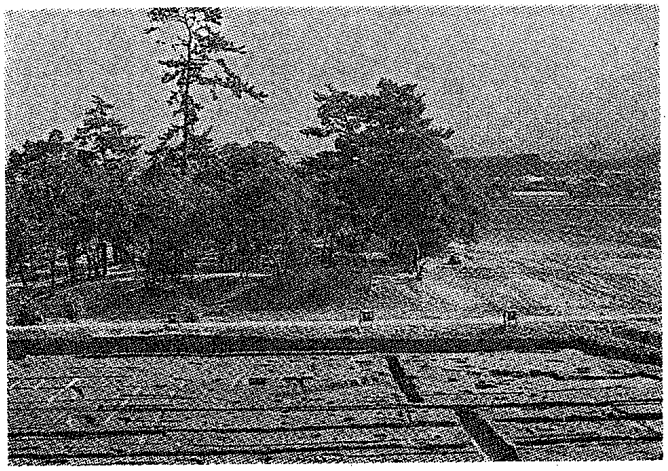
(17) 大脇潔「飛鳥—古代の宮殿を発掘する」(紺野敏文編『仏像を旅する　奈良』所収　至文堂　1991 年)．

(18) 井上光貞他校註『日本書紀』下　日本古典文学大系 68　岩波書店 1965 年．

(19) 真木柱は「太き」の枕詞ともなって「真木柱　太き心は　ありしかど　このわが心　しづめかねつも」(巻二，190) と詠まれている．

豊浦寺講堂跡

小墾田宮推定地



藤原宮跡